

## 中世人の思惟と地震

### ―『方丈記』『愚管抄』など―

岡田美也子

今回の公開講座は、「自然災害と文学」というテーマで、三回シリーズで実施することになりました。その理由は、既にお分かりと存じます。昨年の三月一日に東日本大震災という、私共が全く予想しなかったような大きな地震が起りました。千葉も沿岸部は津波や液状化現象で大きな被害が出ましたし、いまでも放射線量の問題でさまざまな形で影響が残っています。東日本、さらには日本全体にとつての大きな災害であったということになります。また、昨年は地震だけではなく、夏に非常に大きな台風が起きて、多くの人命が失われたり、交通が寸断されたりする被害があいつぎました。

そこで、日本研究センターとして、改めて自然災害が日本の文学にどのように描かれ、またそこからどのような思念が表れているかということを考えようとする次第です。

私は、中世文学を研究している立場から、中世の人たちが災害というものをどう捉えていたか、ということを考えようと思ひ、このようなテーマにいたしました。実は、平安の末期から中世にかけては、災害が非常に多い時代でした。天変地異そのものは、日本の歴史の中で常に発生しているのですが、それがあいつぐ戦乱と重なったこともあって、

人々に非常に大きな印象を残したという面があります。

その様子は、例えば『方丈記』などに記録されているわけですが、その時代の様相と現代とが重なるところがあるように思います。残念ながら、自然災害だけではなく、人事の面、特に政治の面でも混乱を極め、人々の希望が失われているような点においても似ています。

奇しくも今年も、『方丈記』執筆から八百年にあたります。また、NHKの大河ドラマでは『平清盛』が放映されていて、『方丈記』の時代が映像化されています。さらに、今年も辰年ですが、後に触れますように、中世の人たちは、地震の一部は龍によつて起こると考えておりました。

今回は、このような複数の縁があつて、中世の人たちの地震に対する捉え方を見る、いい機会であろうと考えました。思想には各々の時代背景があるため、完全に一致することはないのですが、私たちが今回の震災を考えるヒントがあることを期待しつつ、『方丈記』や『愚管抄』といった書物の災害の言述を通して、当時の人たちの心に迫ってみたいと思います。

まず、配布資料「古記録に見る平安末期の災害」をご覧ください。『方丈記』等に書かれた様々な天変地異、自然災害についてみてまいります。これらは、『方丈記』に基づいて五大災厄と総称されています。

#### 【資料①】

四大種

安元の大火	一一七七年、長明二三歳	火
治承の辻風	一一八〇年、長明二六歳	風
福原遷都	一一八〇年、長明二六歳	

養和の飢饉 一一八一〜二年、長明二七歳 水

元暦の大地震 一一八五年、長明二九歳 地

まず、一一七七年四月二八日に発生した安元の大火は、都の大半を焼いた火災です。八時頃に都の東南から火の手が上がり、西北に広がった。太郎焼亡、次郎焼亡といって、二回にわたる大火事がありました。その被害が内裏・大内裏にまで及んだことがよくわかると思います。次に、治承の辻風、中御門京極付近から大きな竜巻が起きました。『平家物語絵巻』にも、強風で人々が吹き飛ばされそうになっているさま、女性の髪の毛が巻き上がっているさまが描かれています。それから、養和の飢饉。前年に水不足、台風、洪水と水にかかわる天災が続いて食糧がなくなり、大量の餓死者が出ました。それから、今回の話題である元暦の大地震がありました。元暦二年、一一八五年のことでした。

このように、実際は一一七七年から一一八五年の約八年に亘る出来事ですから、特に集中していたとはいえないのかもしれませんが。しかし、動乱の世に同時に様々な自然災害が起きたことで、長明には連続しているかのように意識されたのでしょうか。『方丈記』の中では、これらを四種の枠組みで捉えています。仏教の言葉で、人の身体や自然を成している四つの要素、火・風・水・地のことです。その災いを一つずつ取り上げて、これらに、平清盛の悪行の一つとされた福原への遷都を加えたのが五大災厄です。

ところで、当時、どれくらいの頻度で、またどの程度の規模の地震が発生していたのでしょうか。

東京大学史料編纂所の大日本史料総合データベースによって、「地震」という文字列を検索してみると、ほぼ毎年のように地震の記録があっ

て、本当に日本は地震の多い土地であることがよくわかります。今のようにならば正確な計測器はありませんし、地方の情報はおそらく網羅できなかったにもかかわらず、毎年のように地震の記事があります。また、別の文字列、例えば「大震」（大きな揺れ）や「小震」（小さな揺れ）といった語の記事を加えれば、更に数が増えます。

この中でも、文治一年、すなわち元暦二年、一一八四年の記事が圧倒的に多いというのがお分かりいただけると思います。七月九日が、『方丈記』・『愚管抄』・『平家物語』に取り上げられている元暦の大地震になります。当時の貴族の漢文日記である『玉葉』や『山槐記』などにもこれについての記録はあつて、当時の貴族たちがこの地震をどう受け止めたのかということも詳しく書かれております。それから、遡って治承三年一月七日にも地震の記事があります。こちらの方は貴族の日記では軽く触れられている程度でして、元暦二年七月九日の地震に比べると小さかったのですが、『平家物語』には、これが清盛のクーデターの前兆として取り上げられています。

こうして地震の年表を見ると、やはり元暦二年七月九日の地震は、各段に大規模でしたから、地震研究においても注目されています。それらを見てみましょう。

レジュメに挙げましたのは、元NHK解説員で特に自然関係（地震・天候等）分野が御専門の伊藤和明さんによる解説です。二〇〇九年二月一日、つまり大震災の前の記事です。

京都に大災害をもたらしたこの地震は、一一八五年八月一三日（元暦二年七月九日）の正午ごろに発生した。平家一門が壇ノ浦の

合戦に敗れて滅亡してから、三か月あまり後のことであった。そのため、平家の怨霊の祟りであるとした噂が飛びかったという。

一、この地震では、琵琶湖の南部から京都にかけて大災害となり、とくに白河付近の被害が大きく、法勝寺の九重塔や阿弥陀堂、南大門などが倒壊し、法成寺の回廊も転倒、そのほか尊勝寺や最勝寺など各寺院の堂塔や鐘楼などに大きな被害がでた。比叡山の建物も、ほとんどが倒壊あるいは傾斜したという。京都市内の民家も多数倒壊し、多くの死者がでた。また宇治川にかかる宇治橋が落ちて、渡橋中の一〇人が川に落ち、うち一人が溺死した。こうした被害の状況から、内陸直下の地震としては、かなり大規模なもので、M七・四前後と推定されている。

『方丈記』の記述のなかに、「海は傾きて陸地をひたせり」という表現があるが、ここでいう「海」とは、琵琶湖を指している。内大臣中山忠親の『山槐記』には、伝聞として「近江の湖の水が、北へ流れて減少し、岸辺が干上がったが、後日もとのように水が戻って岸に満ちた」ことが記されている。これが事実とすれば、琵琶湖の南端で津波が起きたのか、それとも地震に伴う地盤の変動があったのか、いずれにせよ謎の現象である。

近年の活断層の調査から、『方丈記』に書かれたこの地震は、琵琶湖西岸断層帯の南部にあたる堅田断層が活動したものと推定されている。そもそも琵琶湖は、太古からの断層活動、つまり地震の累積によって生じた構造湖なのだから、一一八五年の地震は、まさに歴史が繰り返されたものだったといえよう。そして、琵琶湖西岸断層帯の活断層群は、いつか必ず活動して、厳しい内陸直

下地震を引き起こすことは疑いがないのである。

(「伊藤和明のインサイト・アウト

災害史は語るNo.11 『方丈記』に描かれた大地震』  
『防災情報新聞』二〇〇九年二月一日)

この地震では琵琶湖の南部から京都にかけて非常に大きな被害がでました。白河の付近です。法勝寺や法成寺などの都の寺社も大きな被害を受けました。比叡山の建物の倒壊なども『玉葉』に触れられています。内陸の直下型地震でマグニチュード七・四と推定されています。『方丈記』『山槐記』の記述の中には琵琶湖周辺の様子も書かれています。近年の活断層の調査からこの地震は、琵琶湖西岸断層帯の南部にあたる堅田断層が活動したものと推定されているようです。こういう古い記録を活用した地震の検証は、従来あまりされてこなかったのではないかと思います。二〇〇九年の時点で『方丈記』の記録について実際の検証がなされたのは興味深いことです。今回の震災の後、昔の記録に遡って学ぶことがあるのではないかとということで、貞観地震の記録などが改めて取り上げられましたが、古い記録を材料とした自然災害の研究が、今後より盛んになるのではないのでしょうか。

次に、琵琶湖の西岸の断層帯に関する調査研究をまとめたものから引用しておきました。

一一八五年(元暦二年)に近畿地方でマグニチュード七・四の地震が発生し、京都府を中心とする地域で大きな被害があった(宇佐美、二〇〇三)。西山(二〇〇〇)は、史料記述に琵琶湖の水が

北流し、湖岸が一時的に陸化したように思える記載があることなどから、この地震の震源位置を暫定的に琵琶湖西岸南部に推定している。さらに、この地震の際に活動した活断層としては、比叡山東麓に分布する堅田断層や比叡断層を想定することが可能であると指摘している。

また、前述の通り、本断層帯南部の堅田断層で地形・地質的に認められた過去の活動時期は一一世紀以後、一二世紀以前であった可能性があるが、この時期は一一八五年の地震と整合的であり、この地震で本断層帯南部が活動した可能性がある。

(地震調査研究推進本部地震調査委員会)

「琵琶湖西岸断層帯の長期評価の一部改訂について」

平成二二年八月二五日<sup>2)</sup>

西山昭仁氏が、『方丈記』や『山槐記』などの記述に琵琶湖の水が北流し湖岸が一時陸地化したように思える記載があることを基に、この地震の震源位置を暫定的に琵琶湖の西岸の南部とし、比叡山の東(琵琶湖の南部)堅田の辺りの断層が震源地ではなかったかと指摘されています。琵琶湖の西岸の断層帯は北部と南部に分かれるそうです。

このように、文学作品である『方丈記』、歴史資料である漢文日記をもとに、元暦の地震の現象や震源地が明らかにされつつあります。

それでは、本題に入って、この地震を当時の人々がどのように受け止めていたのかということ、『方丈記』を中心に確認していくことにいたします。

資料には『方丈記』の五大災厄のところをすべてあげておきました

が、今回は元暦の大地震のところのみ取り上げることにいたします。

また、同じところかよ、おびただしく大地震振ること侍りき。

そのさま、よのつねならず。山はくづれて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巖割れて谷まろび入る。なぎさを漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ちどをまどはす。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず。或はたふれぬ。塵灰たちのほりて、盛りなる煙の如し。地の動き、家のやぶる音、雷にことならず。家の内にをれば、忽にひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ、空をも飛ぶべからず。龍ならばや、雲にも乗らむ。恐れの中に恐るべかりけるは、只地震なりけりとこそ覚え侍りしか。

まず、地震そのものの描写があります。山が崩れて、川が埋まってしまった。「海は傾きて陸地をひたせり」。頭注にあるように、『山槐記』にはもう少し詳しく書いてあって、琵琶湖の水が北に流れて水位が一〇数メートル減ったとあります。科学的に考えるとどういふことなのか。先ほどの伊藤さんの記事で、琵琶湖の南側の方で津波が出来たのか、地震に伴う地盤の変動が起きたのか、謎の現象であると書かれています。東日本大震災の時も津波が来る前に一旦沖の方に水が引いて行ったという話もありますが、いずれにしてもそれと似た異変が起きたということですね。土が裂けて水が湧き出た。これは液状化の記録と言われます。九条兼実の日記『玉葉』に地面が割れて水が出たということが書かれています。大きな岩も割れて谷に転がり込む。波の上で船は揺れ、道

行く馬は足元が定まらない。都では寺社・寺院等が崩れた。地面が揺れて家が壊れるさまは大きな雷が鳴るようであった……。今は建築技術がしっかりしていますから、地震によって建物が倒壊することは減っているでしょうが、当時はそうした被害が多かったと思います。

「羽なければ、空をも飛ぶべからず」。これは『莊子』に出典があるのではないかと言われていますが、私には山上憶良の歌「世間を憂しとやさしと思へども 飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」が思い出されます。飛び立てれば地面の揺れから逃げられるけれど、人間は飛ぶことができない。「龍ならばや、雲にも乗らむ」。龍であったならば雲にでも乗れるだろうにというのですが、龍の語が唐突に出てくるので、何か出典があるような気もします。新潮古典集成の頭注で触れられており、『愚管抄』や『平家物語』では、この地震が龍に関連付けられています。平家の信仰も背景にあつたのでしょうか、平家の怨霊である龍の仕業と解釈されていたようなのです。しかし、地震の原因が龍であるということと、龍であれば逃げられるのに、というのは捉え方が逆といえます。何か連想が働いているのかもしれませんが、長明には別のイメージがあつたような気がします。「恐れの中に恐るべかりけるは、只地震なりけり」。ただ恐ろしいもの、恐れるべきものはこの地震以外にはない。例えば、火事は天災というより人災で、防げる可能性があります。風による被害を防ぐのは難しいかもしれませんが、地震ほどの危険性はないと思われるのでしょう。飢饉も人災の側面が大きくて、被害を小さくすることができます。しかし、地震ばかりはどうしようもないのです。

続けて、人々が逃げまどい、怪我をしたり、亡くなったりしたであろう中で、ある親子の姿が印象深く描かれています。実は、この部分は、

現存最古の写本である大福光寺本にはなくて、取り扱いに注意が必要な部分ですが、今回は諸本の関係や異同には触れず、『方丈記』全体として扱っておきたいと思います。

其の中に、或る武者のひとり子の六七ばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作りて、はかなげなるあどなし事をして遊び侍りしが、俄にくづれ、埋められて、跡形なく、平にうちひさがれて、二つの目など、一寸ばかりづつうち出だされたるを、父母かかへて、声を惜しまず悲しみあひて侍りしこそ、哀れに悲しく見侍りしか。子の悲しみには、猛きものも恥を忘れけりと覚えて、いとほしくことわりかなとぞ見侍りし。

ある武者の一人っ子で六、七歳くらいの子どもが瓦葺の屋根の下で遊んでいた。地震で倒壊した建物に埋もれてしまって、跡形なく押しつぶされてしまった。目の玉が一寸ずつ飛び出してしまっていて、その我が子を両親が抱えて声を惜しまず泣いている。それを見て哀れに悲しく感じたのであつた。わが子への情愛には武士のような荒々しい者も体面を忘れてしまうもののだと感じ、気の毒でその悲嘆ぶりは当然のことであると思つた、とあります。

ここは、貴族にとつての武士とはどのような存在であつたかということ念頭に読む必要があるだろうと思います。『愚管抄』で保元の乱から武者の世が始まったと述べられているとおり、貴族にとつては、その頃から自分たちとは異質の子どもが自分たちの世界に足を踏み入れてきた、そういう時代として捉えられていたのです。そうした理解しがた

く恐ろしい者であると感じていた人たちが、自分たちと同じように子どもへの愛情を持っていて、その死に体面を忘れて泣き悲しんでいる。そのさまに何かを感じたということなのです。武者に対する視線と親子の愛情ということですね。

そして、親子の死別の場面は、この前の養和の飢饉の記事にもあって、母親が亡くなったのも知らずに、その乳房を吸っている幼児の姿が描写されています。

いとあはれなる事も侍りき。さりがたき妻・をとこ持ちたるものは、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。その故は、わが身をば次にして、人をいたはしく思ふあひだに、まれまれ得たる食ひ物をも、かれにゆづるによりてなり。されば、親子あるものは、定まれる事にて、親ぞ先立ちける。また、母の命尽きたるをも知らずして、いとけなき子の、なほ乳を吸ひつつ臥せるなどもありけり。

災害が起きた時にまずその身を案じる相手は、親にとっては子であり、子にとっては親でありましょう。ここには、すでに母子が心を通わせることができなくなっているという痛ましい姿が描かれている訳ですが、読者としては、母の、子どもを残して死んだ無念さや、自分の命と引き換えに少しでも子どもの命を延ばそうとした思いを読み取ることもできるかもしれません。

一方、当時の仏教思想において、親子の恩愛は執着の一つであり、往生の妨げになるものとされていきました。長明がそれを知らなかったはず

はありません。それを前提に、災害で亡くなった人についても、親子の情など持っていない方が往生できるということになります。しかし、文学が描く人間というのはそういうものではないのです。人が最期に子、あるいは親を想うのは当たり前なのだといいこと。そういったことを掬い取っていくのが文学なのではないかと思っております。長明は、災害で亡くなった人の往生、成仏について直接は触れていません。あえて、そこに目を瞑って描写しているのではないかといい気もいたします。

かく、おびただしく振る事は、しばしにて止みにしかども、そのなごり、しばしは絶えず。世の常、驚くほどの地震、二三十度振らぬ日はなし。十日・廿日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三四度、もしくは一日まぜ、二三日に一度など、おほかた、そのなごり、三月ばかりや侍りけむ。

さて、七月九日の揺れのあと、徐々に減っては行きますが、余震が三か月くらい続きました。他の史料の記録を併せてみると、九月までほぼ毎日のように揺れがあったということが確認できます。

その後、長明は、この災害を通じて思ったこと、感じたことを記しています。

四大種の中に、水・火・風は常に害をなせど、大地にいたりては、ことなる変をなさず。「昔、斉衡のころとか、大地震振りて、東大寺の仏の御頭落ちなど、いみじき事ども侍りけれど、なほこのたびにはしかずとぞ。すなはち、人皆あぢきなき事を述べて、

いささか、心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日かさなり、年経にし後は、ことばにかけて云ひ出づる人だになし。

まず、「四大種」、すなわち物質を構成する四つの要素である地・水・火・風のうち、水・火・風は常に害をなす。しかし、大地についてはこれといった異変を起こさないものだ。なぜなら、この四大種はそれぞれ性質を持っていて、地の性質は安定や維持とされているからです。しかし今回は違った。先例として斉衡の頃、文徳朝の地震もたいへん被害が大きかったそうだが、今回とは比べ物にならなかったそうである、と。

そして、「すなはち」から始まる最後の一文。地震の直後は、人々は皆、物事の虚しさを述べて、少しは「心の濁りもうすらぐ」と見えた。生きている人の心には様々な想いや迷いがある、つまり煩惱に穢され乱されているわけですが、地震の体験とおして無常を解することに よって、仏教の真理に多少でも近づけるように見えた。しかし、月日が重なって年が経った後は「言葉にかけていひ出づる人だになし」。この最後の一文が私たちに非常に重いものを投げかけているように思います。大きな被害を受けた当座は、生き方や死に方、この世のあり方ということにも想いを致す、当時で言えば仏道への機縁を得たとしても、年を経つと人々は忘れてしまうというのです。災害そのものの記憶に加え、その時の感情や思念は忘れ去られ、世の無常を観じて清らかになつた心も、またさまざまな煩惱で濁ってきてしまう。新潮古典集成の三木先生の注では、「(発心通世する人はおろか)事件の折りのことを口にする人さえいないのであった」とされています。

『方丈記』のテーマは無常観と言われることが多いのですが、この記

事には、自然から学ぶ無常や命のはかなさと同時に、人の心の変わりやすさやあてにならないさまをも指摘していると云えます。私たちは、昨年の震災からまだ一年経っていませんので、その新鮮な記憶に基づいて、復興や防災をはじめ、日々の生き方についても考えていると思います。これが何年か経つとどうなるかと考えると、長明の指摘は非常に重要なものがあるのではないかと思います。

さて、ここで、震災前後の『方丈記』の読まれ方の変化を確認しておきたいと思えます。

まず、震災前ですが、近代文学が専門の尾形明子氏が『SABO』という雑誌に書かれたエッセイにおいて「『方丈記』に書かれているような無常観のそこには大自然の猛威の前には生死も紙一重の実感がある」と表現されています。ただ、私たちにとってこの二〇〇八年の時点では、「紙一重」が本当の意味でまだ現実味を持っていなかったのではないかとこの頃も思います。震災前には、『方丈記』に書かれている無常観はまさに観念的なものとして享受されてきたのではないのでしょうか。

次に、震災後に『方丈記』がどのように読まれているかということについてですが、『方丈記』がこれほど多く取り上げられたことはなかったのではないかとこの頃も思います。実にさまざまな場面で言及があります。そこから二つばかりとりあげてみます。

一つ目は、山折哲雄氏によるコラムです。

長明は元暦二年に発生した都の大地震の経験を『方丈記』に書き、日蓮は正嘉元年に起こった鎌倉大地震の経験を背景にして、『立正安国論』を書きました。山折氏は、この二つの書物を比較して、それぞれの性質の違いを「天災」論と「人災」論として捉えられています。

《鴨長明の方丈記の天災論》

……その方丈の空間はかれにとっては何の人生のすべてであり、宇宙の中心であった。それにくらべるとき、世間を騒がす時代の動きや人事の葛藤はすべて変化してやまない不確かなものと映っていた。ひとたび大地が震え雨水があふれれば、手をこまねいてみているほかはなかった。自然の脅威は「天災」以外の何物でもなかったのである。

《日蓮の立正安国論の人災論》

……  
日蓮はこの著作で二つの危機について論じている。法華経をないがしろにすることによって生ずる危機である。一つは国内に不安と混乱をひきおこす「内乱」の危機、もう一つが国家に侵入してくる「外敵」による危機である。そして日本の国土を襲った地震、台風、洪水というあいつぐ災害の発生こそ、そのような内乱と外敵侵入による危機の兆候を示すものと警告を発したのである。かれが地震などの災害を「人災」とみなしていたことがわかるだろう。

《生き方と表裏一体の議論》

鴨長明にとって自然の災害は必然であった。自然がひとたび怒りだせば人間はその前に首を垂れ、服従するほかになく、それに逆するなど思いもよらぬことだった。だが、すべてをあきらめて絶望の淵（ふち）に沈んでいたのではない。なぜなら、吹けばと

ぶような庵（いおり）に身を隠して風流に生きるしたたかな術を心得ていたからだ。かれはおそらく自然に逆らわずに生きる最善の方法を知っていたのである。

それにくらべるとき日蓮の前に襲いかかった自然の災害は、むしろ回避しようと思えば、いつでもそうすることのできる一時的な試練と映っていた。かれは鴨長明のように国家や社会の危難にさいして無常の原理をもちだすことをしなかった。自然の「危機」の発生にたいして、精神の「純化」の重要性を、当時としてはもつとも声を大にして主張した人間であったといつてよいだろう。

……

もしもそうだとするならば、鴨長明と日蓮にみられる中世の天災—人災論を今日われわれの天災—人災論から分かつものは、ただ一つ、かれらが自分の生き方そのものと表裏一体となった議論を展開していたというところにあるのではないだろうか

（【正論】宗教学者・山折哲雄 大災害に向き合う日本人の心象<sup>3</sup>）

長明が自然に逆らわず生きる最善の方法を知っていた、と言つてよいかどうかは、考察の余地があるかと思いますが、少なくとも『方丈記』の災害は、非常に客観的描写がなされていることもあって、自ら主体的、積極的に対処すべきものとは捉えられていないということは言えるでしょう。

もう一つは、『朝日新聞』の記事です。『方丈記』に「冷徹な観察眼」

と「恩愛の情への視線」を見たあと、その執筆の意図を「なぞ」としながら、次のような解釈で文章を閉じています。

無常は悲哀の母とばかりは言えまい。最悪の状況もまた常ならぬものであるなら、無常は好転の希望も宿しているのだ。

〔朝日新聞〕二〇一一年六月二〇日朝刊「文化の扉」欄  
「はじめの方丈記」米原範彦筆

すべてが無常であるならば、悪い状況もまた変わるものである。無常ということポジティブに捉えて、世の変転には良い方向への変化も含まれると捉えられるのではないか、というのです。

中世の、もしくは仏教の無常観をそのままに捉えれば、世界とはそのように虚しいものということと終わってしまいます。それでは今、震災とそれによる被害で苦しむ人々に何の救いにも支えにもなりません。

同じ欄に小説家五木寛之さんのエッセイも掲載されています。親鸞に傾倒していて中世の思想にも詳しい五木さんが、震災後の『方丈記』をどのように捉えられているのか。

……長明はあくまで目に見える災害を描いた。我々は目に見えない災害にさらされている。今回の大震災は、「方丈記」が記録した惨状を超えている。……「フクシマ以前と以後」という表現が成り立つほどの事態を招いたわけです。

放射能汚染から無事ではない我々の生活には、いわば「秋空のニヒリズム」とでもいうべき透明な虚無感が流れ込んでいるよう

です。

仏教に「刹那」という言葉があります。投げやりな感覚ばかりが強調されますが、刹那を生ききろうとする覚悟が今、大事だと思います。

震災による原子力発電所の事故により広範囲に深刻な放射能汚染が発生しました。人間の手で作った物が人間の手でとりかえしのつかない被害を引き起こしてしまっただけでなく、私たちが安全で有益と信じて来たものが崩壊してしまっただけでなく、その中で虚無感にとらわれているように思われる。そのなかで、むしろ、仏教にいう刹那という概念を理解し、それを生ききろうとする覚悟を持つことを提案されています。仏教の根本思想の一つが諸行無常ですが、だから生を悲観するのではなく、そのことを基盤に生き方を考えるということなのです。五木氏は続けて、「『方丈記』は記録文学であると同時に、一つの歌となつて、人を酔わせる。そこには、生を後押しする生命力すらあると感ずるのです」と述べておられます。抽象的な表現で、その真意は少々測りかねますが、『方丈記』のある種のリズムを持った描写や文体に、人々に生きることを促す力強ささえ感じる、という意味に理解しておきたいと思えます。

このように、震災までは、『方丈記』は無常観の文学と一括りにされてきましたけれども、震災後はこれを私たちの生き方の参考にしていく模索がなされているように感じております。同じ中世の作品でも、『愚管抄』や『平家物語』では、この地震を怨霊の仕業とするなどしており、現代人の災害の捉えかたとかい離しています。そうしたなかで、『方丈記』は、私たちの実感に近いものがあるといえましよう。

さて、それでは今回の震災を経験して、実際に私たちの内面にはどのような変化があったでしょうか。その変化には、外に向かうものと内に向かうものがあるように思います。外向する変化としては、例えば、救援や復興の際の連帯や協力の精神があげられます。また、エネルギーに関する考え方もあるでしょう。一方、『方丈記』に触れられていたような、個々の内面の変化にはどのようなことがあったでしょうか。それはあまり表に出ることはないでしょうし、個別多様のものでしょう。

一つの例として、生前整理をめぐる報道をとりあげておきたいと思えます。

去年の秋にNHKの「おはよう日本の首都圏」という番組で「生前整理で生き方を見つめる」というタイトルの放送がありました。「生前整理」という考え方は、今日さまざまな場面で触れられるようになりまし、その課題を扱う講師の方もいるそうで、今回の震災後に起こった動きではありません。ただ、今回の震災後にそうした講座への申込みが非常に多くなって、しかも、今までは七十代の人が多かったのに対して、五十代の人が増えたそうです。「震災の後、なにもない状態で身一つの状態で逃げてきたとおっしゃっていましたよね。それを聞いて物への執着がなくなりました」という参加者のコメントがとりあげられています。ご主人が先に亡くなり、子供がいないので自分が死んだ後、自分の身の回りの持ち物は誰がどうしてくれるんだろう、ということを考えて結果、いつ死んでも悔いがないように整理しておくことにしたこと。ご主人との思い出の品を自分の価値基準で整理していく。片付けるといのは片を付けるということなので、自分自身で片を付けるということが生前整理ということなのではないかと。そして、整理しながら、

残りの人生で自分のやりたいことを見つけたとも。この方は実際に岩手にボランティアにも行かれたということで、物がないう中で避難生活を送られている方と家に戻った後の自身の暮らしを比較して、その後の捉え方が変わったということでした。

この番組に取り上げられた方々のように、私たちも今回のことを通して個々の生き方とか人生の終え方とかどのように生きていくか考えるきっかけを与えられたのかもしれない。個々人がそういうことを自覚するなかで、『方丈記』のような古典文学を何らかのかたちで生き方の参考にする機会もあるかと思えます。ただ、長明に言わせれば、人はそういう内省も時を経て忘れてしまうのだということになりますね。『方丈記』も現時点では非常によく取り上げられていますけれども、数年後にはまた単なる古典作品の一つに戻ってしまうかもしれません。そうならないように私たちのような古典を研究対象としている者ができることとして、時代が違ってもなにか現代人に示唆を与えるようなことを古典の中に見つけて還元していくことを念頭にしていかなければと思えます。

『方丈記』に時間をかけましたので、『愚管抄』と『平家物語』をとりあげる時間がなくなりました。最後に少しだけ触れておきたいと思えます。途中にも申しましたが、『愚管抄』と『平家物語』は、この地震を平家の怨霊と捉えているということに注意しておきたいと思えます。個人の内面を見つめた『方丈記』とは違って、これらの作品は政変や世相について、その要因や意義を解釈しようとする立場から、地震にも歴史の流れにおける意味を付与しています。もっとも龍が地震を引き起こすという考え方は、『愚管抄』や『平家物語』に特有のもので

はなくて、仏教思想のなかにあります。仏が人々に自らの力が無限であるということを示すためにあえて地を揺らす、そのなかの一つが「龍動」や「龍王動」と言われるものであるということです<sup>4</sup>。『方丈記』では、地は害をなさないものだと書いていますから、長明が龍王動のことをどの程度理解していたかなど、今後の課題にしたいと思います。

質問 お尋ねしたいと思います。龍というものは過去から現在まで水との関係が非常に多くて、日本各地の神社にお参りしますと、龍の形をした物がたくさんありますが、架空の動物でありながら、十二支の中に入っているのは何か地震と関係するのでしょうか。龍という存在は日本人にとって切っても切れない関係にあると思いますが、もっと深く捉えた方がいいか、どういう起源なのか、もしご存じなら教えていただければと思います。

岡田 御承知のとおり、龍は、時代的にも空間的にも幅広く表れてくる存在で、非常に多様な側面を持った動物、あるいは一つの現象といってもいいかもしれません。たいへん興味深い題材とっておりますが、龍そのものに関しては勉強不足で、お尋ねの点について十分にお答えすることができません。十二支は中国起源ですから、まず、中国の龍の思想が日本の龍にどの程度残っているのかという問題があると思います。龍に関して様々な研究書がありますが、配布資料にも掲載しました黒田日出男氏の『龍の棲む日本』が今御指摘のあった点について最適の参考書となると思います。日本にとって龍がいかに大きな存在であったかということ、例えば日本の国土そのものが龍とみなされていたことなど、

多角的な研究がなされています。この中には、龍の体が日本列島をぐるりと囲っている古い地図が掲載されています。龍は国土を守護する存在であると同時に国土を害する面もあるわけで、それらがどのように入り組んでいるのか、という疑問も浮かびます。また、平家に焦点を当てると、彼らが信仰していた厳島との関係もあります。そして、御指摘から今気づいたのですが、龍は元来水との縁が深い一方で、地そのものを象徴する存在としても捉えられている。それはいつごろどのようなかたちから発生したものかなど。まだまだ多くの課題があるかと思えます。これから勉強してまいりたいと存じます。本日はありがとうございました。

#### 【註】

- 1 [http://www.bosaiho.jp/reading/item\\_1905.html](http://www.bosaiho.jp/reading/item_1905.html)より。
- 2 [http://www.jishin.go.jp/main/chousa/09aug\\_biwako/index.htm](http://www.jishin.go.jp/main/chousa/09aug_biwako/index.htm)より。文中に引用されている論文は、西山昭仁（一九九八）「元暦二年（一一八五）京都地震の被害実態と地震直後の動静」『歴史地震』一四 一八～四四頁【未見】、西山（二〇〇〇）「元暦二年（一一八五）京都地震における京都周辺地域の被害実態」『歴史地震』一六 一六三～一八四頁【同】、宇佐美龍夫（二〇〇三）：「最新版 日本地震被害総覧」【四一六～二〇〇二】、東京大学出版会。
- 3 M S N産経ニュース 二〇一一年三月二八日 三時一二分配信。 <http://sankei.jp/mns.com/affairs/news/110328/dst11032803130002-n1.htm>より。二〇一一年一月本稿作成時には削除されている。
- 4 黒田日出男「龍の棲む日本」岩波新書 二〇〇三年三月「Ⅲ 龍体と神々と国土守護 五 龍が起こす地震―「龍道」「龍王動」「龍神動」に詳しい。

（おかだ みやこ・本学国際人文学部国際文化学科准教授）

